

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学フォーラム（2014.02）14巻1号:30～35.

創立40周年記念エッセイ  
「看護学科」設置の頃の思い出

清水 哲也

## 創立 40 周年記念エッセイ

### 「看護学科」設置の頃の思い出



元 学長 (1991 年 7 月 ~ 1997 年 6 月)

清水 哲也

#### はじめに

去る平成 25 (2013) 年 11 月 5 日は、旭川医科大学の開学 40 周年記念日でした。当日、旭川グランドホテルで開催された記念行事に文部科学大臣代理としてご出席くださったのは、大臣官房審議官 (高等教育局ご担当) の中岡氏でした。式典の際、印象的だったのは、同氏が、「地域医療に身を挺して貫うために道内高校からの受験生にスープレマシィを付与するという本学の入試制度については、学生の学力低下をきたすのではないかと懸念するには及ばない (ちなみに平成 25 年の「国試」の合格率も国立大学中で最高位を占めていた)」、という藤尾副学長の「プレゼン」を、まるで学生がノートをとるように熱心にメモされていたことでした。

その中岡氏と挨拶を交わした際、私に対して、「あなたは何代目の学長さん？」とのお尋ねがあり、「4 代目です」と申し上げると、「いつから、いつまでですか？」と問われ、「1991 年から 1997 年にかけて、2 期 6 年間です」と答えますと、「6 年間の学長時代にもっとも苦勞された問題は何ですか」と問われました。私は即座に「看護学科設置関連です」と答えました。「どうして？」との質問に、私は以下のように答えました。

#### 看護学科設置に向けて

設置の準備にあたり、文部省 (当時) の医学教育課の看護学科担当の課長補佐から、「大学院教官適任者 (いわゆる「マル合」教官) は、看護要員としての国家資格に加えて、論文が 20 はないと・・・」とのご

指摘をいただきました。そこで、アメリカの看護大学に留学中の日本人ナースに声をかけ、「何とか旭川医大の看護学科「マル合」教官として就任をお願いしたい」と申し上げたところ、「札幌なら考えますが、旭川は極寒の地なのでしょう？」とお断りを食らうといった厳しい状況でした。が、そうこうしているうちに、東大医学部保健学科出身で、イギリス留学中の英文論文 10 編がすべて筆頭著者という、願ってもない候補が見つかり、一般教育の教授が定年ご退職になった後任の席を充当させて頂いて、その方を医学部教授としてお迎えできることになり、ご着任が実現しました。ところが、この教授を足がかりに「マル合」教官少なくとも数名を、と種々努力している最中に、件の教授がお好きな登山で骨折され、ご退職されるという、余りにも不幸なアクシデントに見舞われる仕儀となってしまいました。しかし、幸いその後任者として、臨床看護に経験豊富なパワーのある適任者が見つかり、この方が中心となって、ようやくスムーズに教員探しが軌道に乗ることとなったのです。

#### 病院看護職員の欠員問題

一難去ってまた一難。今度は、本学附属病院における看護職員の欠員問題が発生しました。看護部より提案された暫定案は、ICU を閉鎖し、産科・婦人科病棟と小児科病棟の病床の 50% も一時的に閉鎖するというものでした。「北海道新聞 (道新)」は第一社会面に、「旭川医大病院、看護婦不足のため ICU を全面閉鎖」という見出しで大々的に報道し、医大病院は、まさに重大な局面を迎えるに至りました。

何故そのような事態になってしまったのかと申しますと、札幌市が早々に打ち上げた病床数の「総枠規制」に触発された札幌の一部の私的医療機関が、一齐に「駆けこみ増床」に走り、病床数の増加は自動的に看護定員の増員を必要とするために、まさにわが旭川医大病院看護部が「草刈場」と化してしまったからであります。

悪いことは重なるもので、看護要員が医大病院に魅力を感じなくなった要因の一つに、看護婦宿舎の「居住性」の劣悪さがありました。

まだ国の財政事情が第一次オイルショックから十分に回復していなかった頃ですから、各部屋にトイレやバスルームがなく、各階ごとに共同トイレや共同シャワー室が置かれているといった状況で、若い女性がその「劣悪さ」に我慢できる筈はありませんでした。あたかも櫛の歯を引くように入居者は減少し、遂には看護婦宿舎の入居率は20%台となり、まことに惨憺たる状況に陥りました。

このように、私が学長に就任して最初に着手したのは「カリキュラム」の改革などではなく、宿舎の居住性改善という緊急課題になって仕舞いました。

## 看護婦宿舎対策

さっそく当時の樫野事務局長と一緒に上京し、文部省（当時）の文教施設部の担当官に実状を説明致しましたが、担当官曰く「学長さん、築17年にしかならない宿舎の改装は認められません、東大病院や北大病院の看護婦宿舎の方が、はるかに老朽化しており、旭川医大ばかりを優先させる理由は全くありません」と一蹴されてしまいました。しかし、宮沢賢治よろしく「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」とばかりに、「これは看護定員確保対策の一環なのです」と「北海道新聞」のコピーなどを持参して粘り強い交渉を続けているうちに、担当官も次第に理解を示し始め、遂に「補正予算」の獲得に成功いたしました。

これによって、2室を合わせて1室にすることによって1部屋の床面積を一挙に2倍にするという、まことに画期的な案が認められ、各室に850万をかけて、バス、トイレ、システムキッチン、洗濯機用スペースを設置し、かくして、100室の1DKマンションの完成をみ、この工事だけでも実に8億5000万の巨費を要しましたが、さらに従来から不審者に対する防犯装

置の設置が要望されておりましたので、熱感作照明装置も廊下に取り付けられ、宿舎は名実ともに一新しました。これによって、市内の1DKマンションや札幌方面に姿を消しておりました看護師さん達も、次第に再就職・再入居を開始し、驚くべき短時間のうちに入居率が90%台に跳ね上がり、欠員問題も一挙に解決をみるに至ったのでした。

## 医学部看護学科卒の看護要員の素晴らしさ

私事にわたって大変恐縮ですが、私の5歳の孫が、昨年末、急に高熱を發し、慌てて小生が孫を連れて救急部を受診しましたが、若い看護師さん達の穏やかな、そして品のある対応に、「高等教育」の大切さを肌で感じました。

まさに、医学部看護学科「設置」の意義を痛感いたしました。私の立場（元学長）に言及しない、一市民としての受診でありましたが、品性豊かな温かい言葉づかいで接して下さり、深い感動を覚えました。上述のように、平成8（1996）年の看護学科「設置」に至るまでには、オーバーに表現すれば「マル合」教官の獲得に「血を吐く」ような苦勞をしましたが、それが報われたという想いを、心底、抱きました。



看護学科棟



看護学実習風景  
(平成12年)

## 旭川医科大学 40 年のあゆみ



創設準備室スタッフ



仮校舎（正面玄関）



旭川医科大学創設準備室から  
旭川医科大学へ看板の掛けかえ



昭和 48 年度入学式（第 1 回）

昭和47年	7月1日	旭川医科大学創設準備室設置
昭和48年	9月29日	旭川医科大学設置
	11月5日	第1回入学式挙行
昭和50年	4月1日	附属病院創設準備室設置
昭和51年	5月10日	医学部附属病院設置
昭和54年	4月1日	大学院医学研究科設置
平成8年	4月1日	医学部看護学科設置
平成12年	4月1日	大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称 大学院医学系研究科に修士課程看護学専攻を設置
平成15年	11月5日	開学30周年記念式典挙行
平成16年	4月1日	国立大学法人旭川医科大学発足 アドミッションセンターを入学センターに改組
平成17年	8月1日	医学部附属病院検査部、輸血部を臨床検査・輸血部に統合
	11月1日	医学部附属病院を旭川医科大学病院に改称
	11月7日	病院点滴センター設置
平成18年	1月1日	病院地域医療総合センター設置
	4月1日	医学科基礎医学1大講座及び12講座を5大講座及び4講座に、臨床医学19講座を2大講座及び14講座に再編 病院光学医療診療部設置 病院理学療法室を理学療法部に改組
	11月8日	教育センター設置
平成19年	1月1日	病院感染制御部設置
	5月1日	病院腫瘍センター設置
平成20年	2月13日	病院診療技術部設置
	5月15日	病院呼吸器センター設置
平成21年	7月8日	病院緩和ケア診療部設置
	8月1日	病院栄養管理部設置
	9月9日	臨床シミュレーションセンター設置
	12月1日	泌尿器科学講座を腎泌尿器外科学講座に改称
	12月9日	病院入退院センター設置
平成22年	2月17日	地域医療教育学講座設置
	3月24日	脳機能医工学研究センター設置
	4月1日	復職・子育て・介護支援センター設置 情報処理センターを情報基盤センターに改称
	4月21日	知的財産センター設置
	10月1日	病院救急部を救命救急センターに改組
平成23年	4月1日	教育研究推進センター設置 動物実験施設、実験実習機器センター、放射性同位元素研究施設を教育研究推進センターの技術支援部に改組
	5月1日	病院リハビリテーション科設置
	11月1日	病院乳腺疾患センター設置 病院理学療法部をリハビリテーション部に改組
平成24年	10月1日	地域がん診療連携講座設置
	11月14日	病院透析室を透析センターに改組
平成25年	11月5日	開学40周年記念式典挙行

創立 40 周年記念行事パンフレットより

## 学長挨拶



第七代学長

**吉田 晃 敏**

今から 40 年前の 1973 年・昭和 48 年に、旭川医科大学は「地域医療に根ざした医療、福祉の向上」を旗印に、開学しました。遡ること 4 年前の昭和 44 年頃から、当時の北海道議会では、医師充足の恒久対策について、様々な議論が交わされるようになり、その過程で、新たな国立医科大学の誘致話も浮上。医大誘致に名乗りをあげたのは、旭川、釧路、深川、帯広、函館の 5 市で、特に、旭川市、釧路市、深川市の 3 市は、熱い誘致合戦を繰り広げました。

その結果、昭和 46 年 8 月、当時の堂垣内尚弘北海道知事が「用地、教授、解剖体の確保、開学当初の代替附属病院施設などの諸事情を総合的に判断して、場所を旭川市とする。」と、北海道議会で報告。北海道として、旭川市に国立医科大学を誘致することが正式に決定します。

知事の決断を受けて、当時旭川市長だった五十嵐広三氏（のちの官房長官）が、堂垣内知事ら道内関係者と足並みをそろえ、自民党三役、文教制度調査会、文教部会、文部省（現文部科学省）、大蔵省（現財務省）、北海道開発庁（現国土交通省）などに、積極的に医大誘致を働きかけました。

これらの陳情が功を奏し、国は、北海道の厳しい医療環境と医大の必要性を理解するに至り、昭和 47 年 1 月、「昭和 47 年度予算」編成に係る大臣折衝で、「国立医大創設準備費」が内示され、国立医科大学が旭川市に設置されることが正式に決定しました。

こうして、地域医療に軸足を置く北海道第二の国立大学医学部を持つ旭川医科大学が昭和 48 年 11 月に開学。第一期生として新設大学の門をくぐった 100 人のうちの一人が、私でございました。

その後 40 年の間に、平成 8 年設置の医学部看護学科を含め、4,500 名を超える卒業生を輩出し、地域医療の第一線での活躍を始め、国内外の医療機関、研究機関、行政機関など、幅広い分野へと活動の範囲を広げています。

平成 16 年 4 月には、国が主導する大学の法人化政策の下で、旭川医科大学も国立大学法人として新たなスタートを切りました。少子高齢化が加速し、大学を取り巻く環境も厳しさを増す中で、いま国は、学長のリーダーシップの下で、全ての国立大学が、機能強化に向けて積極的に取り組むことを求めています。

この機能強化におけるひとつの柱が、ミッションの再定義です。すなわち、大学の設置目的を明確にし、公的教育機関としての存在意義を、外部からよく見えるようガラス張りにするということです。

旭川医科大学医学部医学科が掲げる「ミッション」は、以下の通りです。

1. 旭川医科大学の建学の理念に基づき、地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医師・研究者等の養成を積極的に推進する。特に、道内の高校や医療機関と連携し、地域医療に対する強い意欲・使命感を持った学生の積極的な受入れを推進する。
2. 北海道の医療支援の実績から発展した遠隔医療の研究、高齢化に対応した脳機能医工学研究の推進等、地域特性に対応した様々な研究を始めとする研究の実績を活かし、先端的で特色ある研究を推進し、新たな医療技術の開発や医療水準の向上を目指すとともに、次代を担う人材を育成する。
3. 橋渡し研究支援拠点として、基礎研究成果の臨床への応用を強力に推進することにより研究成果の実用化を図り、日本発のイノベーション創出を目指す。
4. 北海道と連携し、道内の地域医療を担う医師の確保及びキャリア形成を一体的に推進し、広大な北海道の医師偏在の解消に貢献する。
5. 地域がん診療連携拠点病院、救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域災害拠点病院等として、地域医療の中核的役割を担う。

開学 40 年という節目を迎えた今、本ミッションにもありますように、地域医療の拡充という原点にもう一度立ち戻りながら、教育・研究・医療の更なる発展、そして、意欲ある医療人の育成に力を尽くして参る所存です。

新たに掲げた“使命（ミッション）”の重みを胸に、次の 10 年に向けた新たなスタートを切る旭川医科大学を、引き続きご支援くださいますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

創立 40 周年記念行事パンフレットより

## 同窓会会長挨拶

医学科同窓会長

**千葉 茂**

(旭川医科大学医学部精神医学講座教授 第1期生)

同窓会を代表して、旭川医科大学開学 40 周年を心よりお慶び申し上げます。

私ども第一期生が 1973 年に入学した時から 40 年、また、最初の卒業生によって医学部医学科同窓会が設立されてから 34 年の歳月が経ちました。

同窓会設立の目的は、会員相互の親睦を図るとともに、母校の発展ならびに医学の進歩に寄与することにあります。これまでに、母校の開学 10 周年、20 周年、および 30 周年記念行事への参画、本学学生のスポーツ・文化活動に対する援助などを行ってまいりました。2009 年には、同窓会設立 30 周年を記念して、記念式典・祝賀会、日野原重明先生による講演会開催などの記念事業、記念誌発刊も行っております。現在、本会は会員数 3,500 名を超える大きな組織に成長し、また、会員の診療・教育・研究活動は道内にとどまらず国内外へとますます広がりを見せております。

本会がこのように発展できましたのは、母校はもちろん、行政や医学・医療、地域社会、その他さまざまな分野の皆様からいただいた多大なご指導ご鞭撻の賜物であり、この場をお借りして心から感謝申し上げます。次第でございます。

結びに、吉田晃敏学長のもとで 40 歳という節目を迎えた母校の誕生日を本会一丸となってお祝い申し上げます。

看護学科同窓会長

**水島 峰子**

この度、旭川医科大学が創立 40 周年を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。旭川医科大学は、オイルショックのさなかである昭和 48 年にスタートしたと、聞き及んでおります。私たち看護学科一期生の多くは、その 4 年後の昭和 52 年に生まれました。看護学科の開設は、さらに 18 年後の平成 8 年になります。

4 年制国立大学で看護学を専門的に学べるということで、本学を志望した同級生が数多くおりました。開学当初は、まだ看護学科の校舎がなく、医学科の施設を使用させて頂きました。さらに私達には先輩が居ないため、様々な面で医学科の皆様方にご援助頂きました。おかげ様で本同窓生も、まもなく 1,000 名に達します。なかには、看護師として海外派遣に従事する者、開業し助産師として地域のお産を支える者、より深く看護を極めたいと本学大学院にもどる者、そして教壇に立つ者…と様々です。

卒業後、このように多様な場で活動できるのは、医療の第一線で活躍し続ける諸先輩方と関係各位の皆様のお暖かなご支援によるものと、同窓会員を代表し心から御礼申し上げます。

これからも私たちは、研鑽を積み専門性を深めていく所存でおります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、開学 40 周年記念を契機とし、旭川医科大学のますますのご発展を心から祈念しお祝いの言葉といたします。

## 創立 40 周年記念行事（平成 25 年 11 月 5 日（火））式次第

### ■ 記念講演会 15:00 ~ 16:00

- 開 会
- 学長挨拶 旭川医科大学長 吉 田 晃 敏
- 講師紹介
- 講 演 聖路加国際メディカルセンター理事長  
旭川医科大学元参与 日野原 重 明
- 花束贈呈
- 閉 会

### ■ 記念式典 17:15 ~ 18:20 (\* 代理出席者が代読)

- 開式の辞
- 学長式辞 旭川医科大学長 吉 田 晃 敏
- 来賓祝辞 文部科学大臣 下 村 博 文\*
- 北海道大学総長 山 口 佳 三\*
- 北海道知事 高 橋 はるみ\*
- 旭川市長 西 川 将 人
- 祝電披露
- 社会貢献報告 学長補佐（国際交流・地域連携）  
健康科学講座教授 吉 田 貴 彦
- 副学長、図書館長、入学センター長  
歴史・哲学教授 藤 尾 均
- 副病院長、手術部教授 平 田 哲
- 閉式の辞

### ■ 記念祝賀会 18:30 ~ 20:00

- 開 宴
- 学長挨拶 旭川医科大学長 吉 田 晃 敏
- 来賓祝辞 元財団法人国立旭川医科大学  
設置協力会理事 伊 藤 義 郎
- 札幌医科大学長 島 本 和 明
- 北海道医師会長 長 瀬 清
- 旭川市医師会長 山 下 裕 久
- 鏡 開 き
- 祝 杯 第 4 代旭川医科大学長 清 水 哲 也
- スピーチ 第 6 代旭川医科大学長 八 竹 直
- 旭川医科大学医学部医学科同窓会長 千 葉 茂
- 旭川医科大学医学部看護学科同窓会長 水 島 峰 子
- 万歳三唱 第 5 代旭川医科大学長 久 保 良 彦
- 閉 宴